



第32回写真の町東川賞

国内作家賞は広川泰士氏、海外作家賞はオスカー・ムニヨス氏ら

第32回写真の町東川賞の受賞者が決定しました。国内作家賞は広川泰士氏(東京)、海外作家賞はオスカー・ムニヨス氏(コロンビア・カリ市)、新人作家賞は池田葉子氏(同)、特別作家賞にはマイケル・ケンナ氏(アメリカ・シアトル市)、飛弾野数右衛門賞には池本喜巳氏(鳥取市)がそれぞれ選ばれました。授賞式は7月30日、農村環境改善センターで、同日から文化ギャラリーで受賞作家作品展(8月31日まで)と受賞作家フォーラム(7月31日だけ)を開く予定です。

審査会は2月23日、桑沢デザイン研究所(東京・渋谷区)で開きました。国内作家賞54人、新人作家賞53人、特別作家賞18人、飛弾野数右衛門賞24人、海外作家賞12人と例年より多い161人がノミネートされました。

国内作家賞は広川泰士氏が選ばれました。最後まで評を二分したのは上田義彦氏で、いずれも華々しいキャリアを誇る写真家です。

選考の決め手となったのは、上田氏が集大成としての回顧的な写真集だったのに対して、広川泰士氏の場合は、長年の実績もさることながら、写真集『BABEL—ORDINARY LANDSCAPES—』が作家の新境地を拓(ひら)いていたからです。

採掘場やダム、丘陵地の住宅地や原発など、人間による自然の変形と干渉を、どこにでも見られる風景として淡々と切り取って、人類への警鐘となる作品に仕上げられています。

新人作家賞は、毎年意見が割れ、今年もご多分にもれませんでした。それは若手から中堅作家までの層の厚さの証左であると思います。何度かの投票

と話し合いを経て最後まで残ったのは、池田葉子、古賀絵里子、西野壮平、増田貴大、城戸保、進藤環、田口和奈。まったく異なる作風の作家たちが残り、僅差で池田葉子氏が新人作家賞を受賞しました。

池田葉子氏は近年評価が高まっているアーティストであり、写真集『Monkey Puzzle』は北海道、長野、栃木、東京、愛知、京都、熊本など日本各地やアメリカ、ベルギー、オランダの何気ない風景を独特のユーモアと色、構成で仕上げた完成度の高い作品集です。

北海道にゆかりのある作家に送る特別作家賞には、マイケル・ケンナ氏が選ばれました。

水墨画のような詩情豊かな作風で知られる国際的な人気作家で、あまりにも有名ゆえにかえって授賞が遅れたのではないかと思われま。国内外で精力的に風景写真をもにしているアメリカ在住のイギリス人作家で、北海道との縁は深く「ケンナの木」として有名になった屈斜路湖畔のミズナラの木を写した作品をはじめとして、北海

道ゆかりの作品をまとめた『Hokaido』、北海道から沖縄まで、30年以上におよぶ作品の中から選りすぐった『Forms of Japan』など、そこに住む者が思いも寄らない画像で、日本の自然の美を讃えています。

地域に貢献のある作家に贈る飛弾野数右衛門賞は、池本喜巳氏に決定しました。

鳥取を中心とした山陰地方の風物を長年撮影し続けてきた写真家です。

『近世店屋考』は、靴屋、苗屋、粉屋、散髪屋など昔ながらの個人商店や伝統工芸の職人を30年以上取材しまとめられた作品。歳月が堆積して昭和で時が止まったような空間に、それぞれが一癖も二癖もありそうな店主たちが味のある表情を見せています。地方にも都市化がおよび、均一的な表情の店舗が多くなる中、人間一人ひとりの存在感と地場を感じさせる貴重な記録です。

今年の海外作家賞の対象国はコロンビア。長年内戦や麻薬カルテルの戦争により国内不安を抱えていましたが、2002(平成14)年のウリベ大統領

による治安回復が功を奏し、2007(同19)年からはフォト・グラフィカ・ボゴタという国際写真祭も隔年で開催されています。

地元の協力を得て、楠本亜紀委員がボゴタで調査し、12人の作家をノミネートしました。若手からベテランまで、いずれも現代コロンビアを代表する作家で、その中でオスカー・ムニヨス氏が賛成多数で選ばれました。

パリのジユドポム等で開催された展覧会『Photographs』は、煙や水に溶ける画像を用いて記憶と消滅(死)を考察し、ダイナミックなインスタレーションを実現しました。

今年で32回目を数える写真の町東川賞。今回も「写真文化首都」にふさわしい素晴らしい作家たちを選出したと審査会は自負しています。しかしこれは一朝一夕に実現したことでも審査会だけの力でもなく、1985(昭和60)年の「写真の町宣言」から30余年、一歩一歩積み重ねた町の人たちの努力とそうした趣旨に共感した世界中の多くの人たちの共感の上に成り立っています。